



2012年10月14日、私は「ウイーン音楽散歩Ⅱ」と題するオルガン・レクチャー・コンサートへ行ってきました。サントリーホールではオルガン・コンサートは定例となっていますが、今年は特にウイーン楽友協会創立200周年の記念すべき年です。その年にウイーン楽友協会の音楽監督でもあったカラヤン氏と縁の深い「サントリーホールのオルガン」は特別な意味を持っていると思います。音楽をこよなく愛しホール建設を計画したサントリーの佐治社長は、ヘルベルト・フォン・カラヤン氏の「オルガンのないホールは家具のない家のようなもの」という忠告に従いオルガン設置を決めました。そしてそれはホールの音響のために重要なことでした。何故なら舞台上のオーケストラと別の場所に設置されるオルガンの音がミックスすることを考えると、互いの音は音響的に最良の位置で出会わなければなりません。そこで舞台位置に対するオルガンの設置位置が重要となるわけです。それはカラヤン氏の「フィルハーモニーではそのことを念頭に置かず、後からオルガンを設置したため音響に苦労がある」という苦い前例からのアドバイスでした。そしてサントリーホールにはウイーン楽友協会と同じ「リーガー社」のオルガンが設置されました。オルガンを組み立てるには建設がすべて終了したあとの、粉塵一つあってはならない場所で6か月を要するそうです。このオルガン設置の経緯は『素顔のカラヤン 二十年後の再会』（眞鍋圭子著・幻冬舎新書）に詳しく書かれています。

そしてこの日のコンサート内容は、まさに神を讃える曲、キリスト教の影響が色濃かったのですが、もともとヨーロッパの音楽は教会や宮廷から発生したのでそれも当然のことでしょう。

1部にアントニオ・サリエリの曲、2部にヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトの曲が1曲ずつ入っていたのはなかなか面白い構成でした。サリエリは悪役扱いされているけれど、モーツァルトの才能を認めて親交を持ち、彼の死後に彼の曲を演奏しているのです、そんなに意地悪な人ではなかったと思います。英雄的な人が出ればライヴァルを設定して比べたがるのは人間の性ですね。でも天才と比べられるのは、それだけ実力があつた証拠でしょう。サリエリはアカデミズム、モーツァルトはアヴァンギャルドでしょうか。サリエリの曲はまじめな印象のとてもきれいな曲でした。全般を通して「地上の曲」という感覚でしたが、モーツァルトの曲はやはり空間的な印象でした。

オルガンの音色は愛らしく踊るところもありましたが、何と言っても重低音音の荘厳な力強さは、この楽器でしか表現できないでしょう。特に1部の最後の曲と2部の最後の曲はその重低音が実に壮大でした。この壮大さは宗教曲に欠かすことができない要素ですね。ヨーロッパの伝統的な音楽（キリスト教圏の曲）を演奏するコンサートホールにオルガンが欠かせないわけです。

指揮は樋口隆一氏。レクチャーの話し手は展覧会でも講演されたウイーン楽友協会室長：オットー・ビーバ氏。オルガンはペーター・プラニアフスキー氏でした。

【第1部】

♪ローベルト・フックス：オルガンのための主題と変奏とフィナーレ嬰ハ短調

1875年：ウイーン楽友協会のオーケストラ指揮者、ウイーン音楽院の和声教授に就任。彼のオペラはありきたりでしたが、合唱はとても個性的な作曲法でした。

♪アントニオ・サリエリ：奉獻唱「ああ、神と富と叡智のなんと深いことか」

1774年：ウイーン宮廷作曲家、イタリア・オペラ指揮者に就任。ウイーン楽友協会創立時から会員として活躍。神々しい神秘的な世界を表現し、合唱が注目されました。

♪ルドルフ・ディットリヒ：オルガンのための2つの性格曲「祈りと嘆き」

彼はこの曲でバッハの確立した音楽上のレトリックを用い、半音階下降法によって神がイエスにどのような苦しみを与えたかを表現しました。それは歌詞が「十字架にかけられたイエス」のことだったからです。東京音楽学校（現：東京藝大）派遣から帰国後、宮廷の音楽長となり、楽友協会にオルガンを入れる計画を立てました。

♪ヨハン・ネーポムク・フンメル：オルガンのための前奏曲とフーガ/慈しみ深き乙女、神の御母よ

神をたたえるために最も難しい（自分の技術がすぎ込める）技法：フーガを用いました。当時の人は彼の作曲法を「古典的、模範的」と書き記しています。最初はモーツァルトの弟子でしたが、後にアルブレヒツベルガー、サリエリに師事しロマン派へ転向しました。ハイドンの後継者としてオルガンを奏し、後にワイマール宮廷楽団の楽長に就任しました。

【第2部】

♪ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト：テ・デウム

この曲は 1830 年にザルツブルクで作曲され、楽友協会の古い建物の起工式で演奏されました。現在の楽友協会の建物は 1870 年に建て替えられたものです。

この曲のコーラスだけクロディウス訳によるドイツ語版によって歌われ、オットー・ビーバ氏より感謝の意が伝えられました。

♪ヨーゼフ・ハイドン：ミサ曲第 2 番変ホ長調/「祝福された聖処女マリアへの賛美のミサ曲」からサンクトゥス、ベネディクトゥス、オサンナ、アニュス・デイ

1：個人的神への賞賛

2：神に対する歓び

3：痛みが伴う神への祈り

ハイドンは神に祈ると気分が良くなったそうで、その気分をオルガン曲の中に書きました。

♪ヨハン・シュトラウスⅡ：結婚前奏曲

彼は舞踊曲の作曲家として有名ですが、実は教会音楽からスタートしました。父が舞踊曲で有名だったため跡を継ぐことが必要でした。この曲は 1896 年、自分の娘の結婚式のために作曲しましたが、その半年後に楽友協会の大ホールで演奏されました。

(°.°) エピソード

J・シュトラウスⅡは娘の結婚式の立ち合いをブラームスに頼んで彼も引き受けた。けれど無類の恥ずかしがり屋のブラームスは「大衆の前に出るなんて恥ずかしい」と当日現れなかった。そこで J・シュトラウスⅡは会場にいる別の友人に急遽立会人をお願いして結婚式は無事行われた。

♪クルト・ローガー：ゴシック風パッサカリア

厳格・深淵・中世ゴシックのイメージ。シェーンベルクの弟子でしたが、後期ロマン派スタイルの作曲をしました。

♪アントン・ブルックナー：タントゥム・エルゴ変ロ長調

楽友協会音楽院入学初期の作品。入学当初から異彩を放ち、卒業試験時には試験官が「彼の方が我々を試験しなければならぬくらいだ」と言ったそうです。

♪フランツ・シュミット：オルガンのための前奏曲ニ長調「ハレルヤ前奏曲」

ウイーン音楽院でブルックナー、フックスに師事。チェロを学びチェロのための作曲をしました。

～～～こうして、創立 200 周年を記念するコンサートは、125 年前の曲で締めくくられました。～～～

【サントリーホール正面玄関（右端の写真）の上方にあるお知らせメロディーからくり盤】

12 時に音楽を響かせましたが、開場時間も別の音楽で知らせてくれます。また建物内では開演 5 分前にお知らせチャイムとアナウンスがあります。余計な言葉はなく和やかに音楽で促され、聴く方も心の準備が整います。



ドイツ語—日本語通訳—演奏—と猫脳キャパシティには忙しかったニャ～。字幕映画は目と耳だけけれど通訳物は両方耳だから。まあ、耳は確かにふたつあるけれど、脳はひとつだから…。(2012.10.4 記)